

一葉、懸命に駆け抜けた二四年余の生涯

長谷川 修

横浜の「港が見える丘公園」にある「神奈川近代文学館」では、特別展が毎年二、三回開かれ、時々楽しいものがある。このところコロナ禍で開催がなかったが、一年半ぶりに「樋口一葉展―わが詩は人のいのちとなりぬべき」があり、出かけた。

一葉の学歴は、小学校高等科四年卒業（一一歳）までだ。一四歳で歌塾「萩の舎」に入門し、師の中島歌子から和歌の他、古文や書道を学ぶ。また上野の図書館にもよく通ったりと、ほとんど独学だ。

一方家計の方は大変だ。一五歳で長兄、一七歳で父を亡くし、一葉は戸主として、母、妹と三人の家族を背負う。女三人による仕立てや針仕事での生活は苦しく、下谷龍泉寺で駄菓子屋を開いたり、質屋通いや高利貸からの借金も経験する。

このような中、彼女は原稿料での生計を考え、一九歳で作家を目指す。二三歳の年『たけくらべ』『にぎりえ』『十三夜』をたて続けに発表し、鷗外・露伴に絶賛されたもののその半年後に結核で亡くなる。懸命に駆け抜けた二四年と半年の生涯だった。

展示物では日記や感想文、和歌、手紙が数多く出展されていた。いずれも流麗な草書で私には解説不能だが、解説を頼りに追うと、一葉のその時々感情の起伏や友人との交流が伺われ、興味深い。副題の「わが詩は人のいのち―」も、日記に記された彼女の文学宣言である。

一葉を、貧困・早世から薄幸の人とみるのが一般的だが、私にはむしろ恵まれた一生に思えた。貧乏が一葉を作家にした面があり、龍泉寺の子供たちの生熊が『たけくらべ』に、丸山福山町の銘酒屋の酌婦との交流が『にぎりえ』に結実した。また、「萩の舎」の師歌子や姉弟子・同門とは、身分の違いを超え自然体で交際する。最後の一、二年には、露伴、孤蝶、藤村、鏡花、敏等が頻繁に樋口家を訪れ、彼女は文学サロンの主宰者だった。

五千円札の肖像が一葉から津田梅子に交替するのも、秒読みに入った。その間一葉さんに合うたびに、彼女の生涯に想いを馳せるだろう。